

鹿児島県与論島の「新しい」方言体系の形成とその背景

— 中学生・高校生の調査をもとに —

現代学芸課程 日本語教育コース 小田立樹

1. 研究の目的

鹿児島県与論島は鹿児島県の最も南にあり、鹿児島市の南約 560km、沖縄本島の北約 20km に位置する人口 5300 人程度の奄美群島の島で、島内の自治体は鹿児島県大島郡与論町のみである。古くから話されている与論方言は、東条操の方言区画では琉球方言のうちの沖縄方言に区分されていたが、近年では西岡(2011)にあるように与論方言は北琉球方言国頭方言に分類されている。現在でも高年層や中年層の日常会話で与論方言は使用されているが、若年層は与論方言を聞いて理解することはできるが話すことはできない、または聞いて理解することもできないものがほとんどである。

大野(1995)は那覇市の高校生が共通語を上位変種に位置づけ、共通語と琉球方言の中間方言であるウチナーヤマトグチを下位変種に位置づけて使用していることを示し、木部(1995)は鹿児島市の若年層が共通語を上位の変種として用い、ネオ方言であるからいも普通語を下位の変種として使用していることを示した。与論方言が琉球方言の一つであり、与論島が鹿児島県に属していることを考えると、中間的な方言体系を持つ鹿児島市や那覇市の若年層と同様に、与論島の若年層も共通語とは異なる中間的な方言体系をもっていて、日常会話のようにスタイルの低い場面で使用しているのではないだろうか。

町(2005)は与論島の若年層(15 歳)が日常会話でウチナーヤマトグチを使用していることを明らかにしたが、与論島は行政区分上鹿児島県に属しているため、教員や警察官など一部の公務員はほとんどが鹿児島本土からの移住者(若年層～中年層)である。彼らは先に述べたからいも普通語の話者であり、与論島の中学生・高校生が一日の大半を学校で過ごしていることを考えると、中学生・高校生は教員との会話を通して、日常的にからいも普通語と接触していることになる。これは与論島で生まれ育った者でも、鹿児島本土のからいも普通語を習得し、使用する可能性があることを意味している。

そこで、本稿では「共通語とは異なる中間的な方言体系」を「ユンヌ普通語(ユンヌは与論方言で「与論」の意)」とし、ユンヌ普通語の体系を明らかにするために、ウチナーヤマトグチだけでなく、からいも普通語を調査項目に含めた語彙の使用に関するアンケート調

査を中学生・高校生を対象に行なった。さらに言語生活や方言意識に関するアンケートも行なうことで、からいも普通語やウチナーヤマトグチの使用・接触の背景を明らかにしていく。

2. 調査の概要

語彙・表現の使用に関する第1回のアンケート調査を2014年10月に行い、方言意識や言語生活に関する第2回のアンケート調査を2015年1月に行った。語彙調査の項目にはからいも普通語・ウチナーヤマトグチだけでなく、永田(1996)、ロング(2013)をもとに、奄美群島で最も人口の多い奄美大島の若年層使用語や、町(2005)の与論島の若年層使用語を含めた。からいも普通語・ウチナーヤマトグチ・奄美大島若年層使用語・与論島若年層使用語の4つのカテゴリーを設定し、調査項目(30項目)を各カテゴリーに分類したが、九州・沖縄全般で見られる語(ナオス)等、複数のカテゴリーにまたがって分類されているものもある。各カテゴリーの項目の一部を以下に示す。

からいも普通語	ウチナーヤマトグチ	奄美大島	与論島
ラーフル(黒板消し)	(学校を)アルイテイル (通っている)	チ(方向を表す格助詞 共通語の「へ,ニ」に相当)	チヨ(叙述内容強調の 終助詞)
おつかれさま(です)(使用 場面が共通語よりも広い)	上等ダ(素晴らしい)	～シキレナイ(能力可能の 否定)	ワケ(疑問を表す終助詞)
ハワク(ほうきで掃く)	ドンドンする(ドキドキする)	見レ、起キレ(見ろ、起きろ)	行く/来るの用法(動作の視 点が共通語と異なる)
ケ(-)(疑問を表す終助詞)	ネ(疑問を表す終助詞)		

また、回答者の移住歴を記入する欄や、与論島の方言・言葉について、知っていることや思うことを記入する自由記述欄を設けた。

方言意識・言語生活に関する調査では、鹿児島・沖縄に行く頻度、家族の出身地、鹿児島・沖縄・与論方言と標準語(共通語)に対するイメージを調査項目とした。

3. 調査結果

第1回の語彙調査では、「1. 使う(言う、する)」・「2. 聞いたことはあるが使わない(言わない、しない)」・「3. 聞いたこともない」の中から一つ選んで回答する選択式にしたため、各選択肢に3点、2点、1点を与えて、各方言の使用・接触の度合いを数値化したところ、次のような結果が得られた。

	全体平均点	からいも	ウチナー	奄美	与論
平均点	2.02	2.01	2.01	1.80	2.20
最高点	2.57	2.56	2.57	2.67	3.00
最低点	1.40	1.36	1.40	1.00	1.00

※中央値は 2.00

からいも普通語は、ウチナーヤマトグチとほぼ同程度の使用・接触があることがわかった。また、自由記述欄には「母が大阪出身のため、大阪弁を話してしまうことがよくあるが、周りの人も大阪弁を話しているのを耳にする」と言う回答が見られた。これは中学生・高校生の親にあたる中年層が、就職・進学のために高校卒業後にほとんどが関東や関西に移住し、関東・関西出身の配偶者を連れて、島にUターンしたためと考えられる。与論島で話されている方言は与論方言とウチナーヤマトグチだけではなく、からいも普通語も話されており、さらに関東・関西の方言が話されている可能性があることが明らかになった。さらに、若年層は既に与論方言を話すことができないが、ごく一部の与論方言の語彙は日常会話で使用していることが明らかになった。

第2回の言語生活に関する調査では、沖縄よりも鹿児島に行く頻度の方が多いこと、与論島の中学校・高校は生徒数が少なく、教師と生徒の距離が近いいためか、約6割の回答者が授業以外でも教員と毎日会話(雑談等)をしていることが明らかになった。

方言意識に関する調査では、10の評価語を設定し、「とてもそう思う」・「少しそう思う」・「あまりそう思わない」・「全くそう思わない」のいずれかで答え、各選択肢に4点、3点、2点、1点、を与え、各評価語を数値化してその度合いを測定した(中央値は2.50)。

	丁寧	汚い	早口	ゆっくり	知的	親しみ	都会的	田舎くさい	使いたい	使いたくない
鹿児島	2.48	1.84	2.30	2.13	2.08	2.46	1.79	2.41	2.31	2.17
沖縄	2.42	1.76	2.34	2.34	2.02	2.80	1.77	2.53	2.42	2.16
与論	2.44	1.76	2.99	1.82	2.10	2.73	1.37	2.87	2.79	1.85
標準語	3.37	1.73	2.17	2.22	2.87	3.28	3.00	1.29	3.58	1.36

鹿児島方言はどの評価語も2.50を超えないことから、鹿児島方言に対する認識や知識そのものが低いと考えられる。沖縄方言は「親しみ(やすい)」の数値が高いが、これは与論島が地理的・文化的・方言的に沖縄に近いためと考えられる。与論方言は「田舎くさい」「早口」といったマイナスイメージの評価語に対する点数が高い一方、「親しみ」「使いたい」といった評価語の点数も高い。これは1990年代から行われている、与論方言の伝承・保存活動の成果の一つと考えられる。標準語は一貫してプラスイメージの評価語の点数が高く、マイナスイメージの評価語の点数が低い。与論島の中学生・高校生も、標準語の威信の高さを認めているようだ。

また、第1回の調査結果と第2回の調査結果を総合すると、各方言の使用・接触の点数が高いグループは、プラスイメージの評価語の点数も高く、逆に使用・接触の点数が低いグループは、マイナスイメージの評価語の点数が高いことがわかった。したがって、方言

に対するイメージは、方言の使用などに結び付いていると言える。

4. 考察

2回のアンケート調査結果に、与論島で行われてきたいわゆる「方言札」を用いた国語教育を合わせて考えると、からいも普通語は厳格な国語教育が廃止された1970年代末から、教師が使用し始めたことで、与論島に流入したと考えられる。これは、国語教育を行うためには、教師がまず母方言(鹿児島方言・からいも普通語)を話さないように注意を払い、標準語を話す必要があるが、国語教育が廃止されたのであれば、教師は必ずしも「標準語」を話す必要はなく、その結果教師が母方言であるからいも普通語を、自然と話すようになったと考えられるためである。

また、1990年代に入ると関東や関西に移住した与論島の中年層が、関東・関西出身の配偶者を伴って島にUターンしたことで、関東・関西方言が流入した可能性がある。さらに、与論方言の伝承活動が行われるようになったことで、若年層は与論方言に愛着を持ち、断片的に与論方言の語彙を使用するようになったと考えられる。

したがって、「ユンヌ共通語」はウチナーヤマトグチとからいも普通語、さらに関東・関西方言の語彙や与論方言のごく一部の語彙を含む、複雑な方言体系を成していると考えられる。特にからいも普通語や関東・関西方言は、移住者による方言接触の結果であるため、ある種のコイナーであるとも考えられる。

参考文献

- 大野眞男(1995)「中間方言としてのウチナーヤマトグチの位相」『言語 別冊』大修館書店 24-12:182-186
- 木部暢子(1995)「方言から「からいも普通語」へ」『言語 別冊』大修館書店 24-12:170-177
- 木部暢子(2013)『くそだったんだ!日本語〉じゃって方言なおもしとか』岩波書店:174-178
- 永田高志(1996)『地域語の生態シリーズ 琉球で生まれた共通語—琉球』おうふう:8,61-72,142-143
- 町博光(2005)「奄美群島方言の世代間変容—場面設定の対話資料による—」町博光研究代表『バイリンガルとしてみた奄美群島方言の位相論的研究』平成14~16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)1)研究成果報告書:3-12
- ロング ダニエル(2013)「奄美大島のトン普通語と沖縄本島のウチナーヤマトグチの言語形式に見られる共通点と相違点」『日本語研究』33:91-92